

谷間のしじゅうから

小川未明

青空文庫

春はるのころ、一度ひとこの谷間たにまを訪おとずれたことのあるしじゅうからは、
 やがて涼風すずかぜのたとうとする今日きょう、谷川たにがわの岸きしにあつた同じ石おなじいしの
 上うへに降りて、なつかしそうに、あたりの景色けしきをながめていたので
 あります。

小鳥ことりたちにとって、この二、三か月の間げつあいだは、かなり長い間ながあいだのこ
 とでありました。そのときは、やつと雪ゆきの消きえたばかりで、見みる
 ものがすべて希望きぼうに燃もえ立たつていきいきとしていました。しじゅう
 うからは、葉はのしげったかしの木きを見みつけて、巢すをかけようかと、
 友ともだちと枝えだの間あいだを飛とびまわっていました。日にっ光こうの射さしぐあいな
 どをしらべなければならなかったからです。

すると、かしの木は、不平らしい顔つきをして、

「承諾なしに、私の枝へ巣をかけてはいけません。」といいました。

それは、無理のない言い分でありました。しじゅうからは、ついでに断るのを忘れてしまったのです。なぜなら、巣をかけることは鳥たちにとって、あたりまえのことで、わるいことと思っていないからでした。

「ごめんください。どうぞ私に、小さな枝を貸してくださいませんか？」と、頼みました。

「昨日も、美しいこまどりがきて、いろいろ頼んだのですけれど、どうも鳥に巣をかけさせると葉を汚して、いやになるから許さな

かったのですよ。いつそすすめばちにでも貸してやったら、いたずら者が寄りつかなくていいかと思つていゝのです。」と、ごうまんない方をして、かしの木は、答えました。

「あの、すごい剣を持つてゐるすすめばちにですか？」

「そうですよ。」

ちようど、このとき、人の声でしたので、しじゆうからは、驚いて下を見ると、細い道を草を分けながら、おじいさんが、子供をつれて、まきを背負つて、ふもとの方へ下つていくところでした。

「ああ、ここに、こんな人の通り道があつたのか？ あのお臆病な、注意深いこまどりか、なんで頼んでも、こんなところ

へ巣すをかけよう。」

しじゅうからは、この威張いばっているかしの木きが、いいかげんなことをいっていると知しりましたので、自分じぶんもここへ巣すをかけるのは考かんがえ物ものだと思おもって、他たの木きへと移うつっていききました。

彼かれの止とまった、とちのきは、みごとな白しろい花はなを開ひらいたばかりでした。

「しじゅうからさん、私わたしの花はなと、あすこに咲さいているうつぎの花はなと、どちらがきれいでしょう？」と、とちのきは、しじゅうからに向むかって、ききました。

「さあ、あなたは、白しろい花はなですし、あちらは紅あかい色いろですね。どちららもみごとではありませんか？」

しじゅうからは、なぜとちのきが、こんなつまらない問いを出したのかと疑わずにはいられなかったのです。

「いえ、昨日も旅の珍しい鳥が、ここへやってきました。私へは止まらなかったもので、私は、悲しくてなりません。」「と、とちのきは、さも無念そうに、大きな葉をはたはたとふるわせていました。

「とちのきさん、あなたは、こんなに太いし、そして、高いではありませんか。きつと旅の鳥は、あの低い木を憐れと思つて止まったのですよ。」「と、しじゅうからは、とちのきをなぐさめたのであります。彼はかかる険しい谷間の片すみにも、こうした悩みと争いがあるのかと痛ましく感じました。

そのつぎに、しじゅうからは、しらかばの枝へ移ったのです。

若い、すうらりとしたしらかばは、ちようど更衣ころもがえをしている

ところでありました。

「そんなに私を見てはいけません。どうしてつて、恥ずかしいの

ですもの。私のお化粧けしやうが、すっかりできあがった時分に、もう

一度ここへきて、私を見てくださいまし。」といいました。

「しらかばさん、その時分、私たちは、どこにいるか知れませ

が、たとえば、やつてこなくてもおこつてはいけません。それは、

けつしてあなたを忘れたのでなく、たぶんそのころは、いちばん

私たちの生活に忙しいときだからです。そのかわり、このつぎ、

こちらへきたときに、あなたがどんなに美しくなっているか、

見るのがたのしみであります。「といたしました。しじゅうからは、

しらかばのうぬぼれが、むしろ、いじらしくおも思われました。

最後に、彼は、この石の上うえに下りて、水を飲のみみ、岸きしに立たつてい

るかえでの木きと、それからんだむべの木きとを見上みあげたのであり

ます。急きゆう流りゆうが、二本ほんの木きの根ねを洗あらっていました。そして、も

し大雨おおあめが降ふつて、出しゅつ水すいをしたら、彼かれらは、根ねこそぎに、さ

らわれてしまう運命うんめいにありました。しかし、二本ほんの木きはしつか

りと、たがいに根ねを張はつて助たすけ合あっていました。しじゅうからは、

このようすを見みると、深ふかく同どう情じょうをしたのであります。

「一つ、つぼみがつきましたね。」と、しじゅうからはやさしい

調子ちようしで、むべに向むかって声こゑをかけました。

これを聞いて、かえでの木は、我がことのように喜んで、

「今年ことしはじめて咲くのですよ。きつと、ふじの花はなよりも美しいし、

また、ばらの花はなよりも美しいと思おもっています。」といいました。

「たしかにきれいです。そして、大きい実みを結むすんでください

。」と、しじゅうからは、答こたえました。

今度こんどは、むべが、友ともだちについて、語かたりました。

「かえでさんのこの若芽わかめは、すてきではありませんか。これが伸

びたら、きつと枝えだぶりがよくなって、このあたりで一番ばんの木きにな

ると、あなたは、お思おもいになりませんか。」といいました。

「たしかに、りっぱな枝えだぶりになります。もし、わるい虫むしがつい

ていたら、私わたしが、取とってあげますよ。」と、しじゅうからが、か

えでの木きにいいました。

「よくごしんせつにいつてくださいました。だが私わたしたちは、冬ふゆの間雪あゆきと風かぜにさらされていきました。しかもここはいちばん吹雪ふぶきのはげしいところでした。お蔭かげで虫むしの卵たまごは、みんな死しんでしまいました。」と、かえでの木きは、答こたえたが、その言葉ことばには、元氣げんきがみちみちていました。むべはまたしなやかなつるを延のばして、あたかも大空おおぞらの太陽たいようをつかもうとするように、きらきらと輝かがやいていました。

この日ひは、遠とおくでやまばとが鳴なき、近ちかくの村むらでは、かつこうとうぐいすが鳴ないていました。

そのときから、三月みつきの日数ひかずがたったのであります。しじゅうか

らは、むべとかえでのことを思い出して、飛んできたのでした。
 すでに谷川の水の飛沫のかかるこずえは紅葉をして夏はいき
 かけていました。

とちのきも、しらかばの木も、黙々として、やがてやつてく
 る凋落の季節を考えているごとくでありました。あたりの谷
 にこだまして、夕暮れを告げるひぐらしの声が、しきりにしてい
 ます。

「あれから、きれいな花が咲きましたか。そして、りっぱな実が
 なりましたか？」と、しじゅうからは、むべに声をかけました。

むべの木は、頭を振って、

「花は、あの後、じきに、情無しの風にもぎとられてしまいま

した。」と、^{こた}答えました。そして、むべのつるが、しつかりと枯^かれた小枝^{こえだ}を握^{にぎ}っているのを見て、しじゅうからは、

「それは、なんですか？」と、たずねたのでした。

「これは、あのと時のみごとなかえでの若芽^{わかめ}です。ある日^ひ、大き^{おお}な、かみきりむしが飛^とんできてぷつりと切^きってしまいました。私^{わたし}は、かわいそうな小枝^{こえだ}が、下^{した}の流れ^{なが}に落^おちてしまわないうちに、急^{いそ}いで捕^とらえたのでした。いや、あのかわいらしい小枝^{こえだ}が、私^{わたし}の手^てにすがったのでした。どうして、これが放^{はな}せましよう？」

しじゅうからは、みんなが希望^{きぼう}に燃^もえたついていた、過^すぎ去^さった春^{はる}がいまさらのごとく惜^おしまれたのでした。彼^{かれ}は、谷^{たに}風^{かぜ}に、むべのつるが、空^{むな}しく枯^かれ枝^{えだ}を握^{にぎ}ったまま夕^{ゆう}空^{ぞら}になびいている姿^{すがた}

をながめながら、どうか、このつぎの春^{はる}までに、むべも、かえでも、もつと太^{ふと}く、強^{つよ}くなるようにといつて、どこへとなく飛^とんでいきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

初出：「赤い鳥 鈴木三重吉追悼号」

1936（昭和11）年10月

※表題は底本では、「谷間《たにま》のしじゅうから」となっています。

※初出時の表題は「谷間の四十雀」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年2月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

谷間のしじゅうから

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>